

アイゼンク性格検査 (EPI) と刺激希求性 尺度 (SSS) を通してみた外向性の構造

寺崎 正治・今田 寛

パーソナリティを記述するための基本的な次元として、外向性と神経症的傾向（情動性）の2次元が古くから一般に認められてきた。中でも、Eysenck はこれらの2次元は独立しており、super factor としてとらえられるであろうことを現在に至るまで一貫して主張してきた (Eysenck, 1987)。しかし、外向性次元に関しては、その構造について様々な論議がなされてきたことも事実である。古くは、Carrigan (1960) によって外向性の単一次元性に疑問が投げかけられ、少なくとも外向性には2つの構成要素が考えられるべきであることが主張された。Carrigan によって指摘されたこれらの2つの構成要素はいずれも伝統的な外向性の概念と関連しており、1つは主にアメリカ社会において発展してきたもので、社交性や対人関係における気軽さを強調した外向性の概念であり、他の1つはヨーロッパ的な外向性の概念で、主に衝動的な特性に関連したものであろうと解釈された。

これを受けて、Eysenck & Eysenck (1963) は外向性の下位特性として、社交性と衝動性の2特性を同定した。しかし、これらの下位特性は互いに適度に相関していることを示し、外向性の単一次元性がそこなわれる訳ではないことを強調している。それにもかかわらず、この発見は外向性および神経症的傾向に関する初期の質問紙である Maudsley Personality Inventory (MPI) から Eysenck & Eysenck (1964) による Eysenck Personality Inventory (EPI) への発展の際に、少なからず影響を及ぼしたように思われる。すなわち、MPI における外向性尺度は主に社交性に関する特性を測定していたのに対して、

EPI の外向性尺度を構成する項目には衝動性に関する項目が取り入れられた点である。しかし、衝動性特性に関しては、その概念がこの時点において経験的にも理論的にもかならずしも明確になっていたわけではない。

その後、衝動性はさらにいくつかの下位特性に分かれることが見い出された (Eysenck & Eysenck, 1977)。Eysenck & Eysenck (1977) は、伝統的に衝動性を見出しのもとに分類されてきた項目が、果たして単一の因子として抽出されるか否かを検討した。その結果、4つの衝動性因子を報告している。第1因子は狭義の衝動性と彼等が名付けたもので、“Do you generally do and say things without stopping to think?” のような項目に代表される。他の3つの因子は、それぞれ risk-taking, non-planning, liveliness と命名された。さらに、risk-taking, non-planning, liveliness はいずれも Eysenck Personality Questionnaire (Eysenck & Eysenck, 1975) の外向性尺度項目から抽出された13項目からなる社交性尺度とは正の相関を示し、神経症的傾向尺度とは無相関あるいは弱い負の相関を示したのに対して、狭義の衝動性は社交性との相関は弱く神経症的傾向とは弱いながらも正の相関を示した。これらの事実から彼等は衝動性の概念は、特に第1因子に代表される狭義の衝動性と、これ以外の衝動性は区別されるであろうと論じている。

特に、risk-taking や non-planning に代表される広義の衝動性に関しては、これらの項目の中には Zuckerman (1979) の刺激希求性尺度 (Sensation-Seeking Scale; SSS) の項目内容と類似しているものが存在する。このことは、EPI で測定された外向性と刺激希求性特性が正に相関するという経験的事実とも一致する。例えば、SSS Form IV の General Sensation Seeking (GS) 尺度と EPI の外向性 (E) 尺度は、0.12から0.58の範囲で相関したことが報告されている (Bone & Montgomery, 1970; Farelly & Farelly, 1967, 1970; Zuckerman & Link, 1968)。さらに、EPI における外向性の下位尺度である衝動性尺度と SSS の各下位尺度得点との相関は、EPI における社交性尺度と SSS の各下位尺度得点との相関よりも高いことが報告されている (Zuckerman, 1979)。このように、刺激希求性と EPI における外向性は比較的類似するも

の、完全に一致する概念でもないことが示唆されており、特に外向性のなかでも衝動性に関する構成要素との親和性が高いのではないかと考えられた (Eysenck & Eysenck, 1978)。

一方、外向性に関する Eysenck の理論と刺激希求性に関する Zuckerman の理論とは極めて類似している。前者は覚醒の個人差に関する生物学的理論であり、後者は刺激作用の最適水準の個人差に関する生物学的理論であるが、これらの理論から導かれる個人の行動の予測は大筋において合致する。通常、外向性に関する理論を検証する際には、EPI がよく用いられてきた。そして、しばしば EPI の外向性尺度項目の中から社交性に関する項目と衝動性に関する項目を抽出し、2つの下位尺度別に得点を算出する試みが行われた。近年、これらの研究を通して明らかになってきた事実のひとつは、EPI の外向性尺度 (E) を構成している項目の中でも衝動性に関する項目のみを抽出してつくられた下位尺度を用いた場合のほうが理論的予測を強く支持している点である。このように外向性特性のどのような構成要素が外向性理論から導かれるさまざまな予測とどのように結合するのかを明らかにすることは、外向性の本質を考える上で重要であろう。このためには外向性の表現型に関する構造を明確にしておく必要がある。

そこで、本研究においては、日本語版 SSS と日本語版 EPI を用い、SSS によって測定される刺激希求性特性、および EPI の外向性特性がどのような構造を示すものであるかを項目の水準において分析することを試みた。

ここでの具体的な目的は次の2点である。まず第一に、果たして、刺激希求性特性は Eysenck の外向性特性と同様に神経症的次元とは独立した外向性次元に属するものであるかを検討する。第2に SSS の各項目と EPI の外向性尺度項目を合わせ分析し、外向性次元を形作る下位特性の構造を記述する。このことにより、SSS の各下位尺度および EPI の E 尺度が外向性のどのような側面を主に測定しているのかを明らかにする。

研究 1

目的

刺激希求性尺度の質問項目と EPI における外向性尺度 (E) および神経症的傾向尺度 (N) の質問項目を因子分析することにより, 外向性および神経症的傾向の 2 次元が同定されるかを検討した。

方法

被験者: 大学生, 男子 329 名と女子 286 名の計 615 名である。各々の平均年齢は 19.3 才 (SD=1.4) および 18.5 才 (SD=0.6) であった。

手続き: 男女大学生 615 名に対して, 日本語版 EPI Form A (岸本, 1987) と日本語版 SSS (寺崎・塩見・岸本・平岡, 1987) を実施した。続いて, 得られた資料に対して主因子法による因子分析を行なった。分析の対象になった資料は EPI の全項目 (57 項目) と SSS の全項目 (38 項目) の計 95 項目に対する応答結果である。ここでは, 外向性および神経症的傾向に関する 2 因子の存在が仮定されたため, 2 因子に限定して抽出を行ない Varimax 回転を実施した。本研究における因子分析は全て SAS (ver. 5) を用いて行なった。

結果および考察

Table 1 は第 1 および第 2 因子に 0.30 以上の負荷量を示した項目の番号を EPI と SSS の各尺度毎に示したものである。Table 1 より次の事実が明らかになった。まず, EPI の外向性尺度項目の 24 項目中, 13 項目と SSS の全項目 38 項目中, 19 項目は第 1 因子に負荷を示した。SSS の下位尺度項目の中では, 特に Thrill and adventure seeking (TAS) と Disinhibition (Dis) の項目, さらに Experience seeking (ES) の一部の項目が第 1 因子に負荷を示した。次に, 第 2 因子に負荷を示した項目は, EPI の神経症的傾向尺度項目の 24 項目中, 22 項目であった。また, EPI の外向性尺度項目の内, 3 項目がこの因子に負荷

Table 1 SSS and EPI items loaded on Factor 1 and Factor 2
(The number in parenthesis denotes the number of the item in each scale)

Scale	Item's No. on Factor 1	Item's No. on Factor 2
Sensation-Seeking Scale (SSS)		
TAS (10)	1, 5, 9, 13, 17, 21, 25, 29, 33, 36, total=10	total=0
ES (10)	11, 23, 31, total=3	total=0
Dis (10)	2, 10, 22, 26, 34, 37, total=6	total=0
BS (8)	total=0	total=0
Eysenck Personality Inventory (EPI)		
E (24)	1, 10, 15, 17, 22, 25, 27, 29, 39, 44, 46, 51, 56, total=13	3, 49, 51, total=3
N (24)	total=0	7, 9, 11, 14, 16, 19, 21, 23, 26, 28, 31, 33, 35, 38, 40, 43, 45, 47, 50, 52, 55, 57, total=22

Notes. Factor loadings of the presented items are above .30.

TAS : Thrill and adventure seeking ; ES : Experience seeking ; Dis : Disinhibition ; BS : Boredom susceptibility ; E : Extraversion ; N : Neuroticism

を示したが、SSS の項目はこの因子に負荷を示さなかった。

以上の事実から抽出された 2 因子は予想されたように外向性因子(第 1 因子)と神経症的傾向因子(第 2 因子)であるように思われる。SSS の項目の約半数と EPI の外向性尺度項目の約半数は同次元、すなわち外向性次元に属している項目と考えることができる。これに対して、第 2 因子が神経症的傾向に関する因子であることは、EPI の神経症的傾向尺度項目の 2 項目を除く全ての項目がこの因子に負荷を示していることより明らかである。

ところが、ここで抽出した 2 因子のいずれにも負荷しなかった項目が SSS と EPI の E 項目の中に見られた点は注意しなければならないであろう。例えば、EPI の E 尺度項目である「なにかする前にはその事についてよく考えてみますか。」や、「決断する前に、あらゆる利益と不利益を注意深く考えてみますか。」に代表される、いわゆる狭義の衝動性に関連するであろうと思われる項

目もこの中に含まれている。SSS の項目では、SSS の4つの下位尺度の内、BS 尺度の全項目（8項目）、ES 尺度の7項目（10項目中）、Dis 尺度の4項目（10項目中）は第1および第2因子のいずれにも負荷を示さなかった。

これらの結果より、外向性と神経症的傾向に関する2次元が存在することは明らかになったが、SSS の項目や EPI のE項目は、複数の因子によって記述されるべきことが示唆された。そこで、EPI のE項目と SSS の項目に限定して再び因子分析を行うことにより、外向性特性に関連する諸特性の因子的構造について検討することが必要になる。

研究 2

目的

EPI のE項目と SSS の項目を用い、これらの質問紙によって、測定される外向性に関連した諸特性の構造を探ることを目的とした。

方法

研究1において収集された資料に基づき、EPI のE項目（24項目）と SSS の全項目（38項目）の合計62項目に関して、主因子法による因子分析を行った後、Promax 法を用いて因子の回転を行った。今回は因子数に関する明確な仮説が存在しないので、探索的に因子の抽出を行った。因子分析の結果、固有値が1.0以上の因子が5つ存在した。そこで、抽出する因子数を5、3、2と変化した結果にもとづき、抽出された因子がどのように少数の因子へと収束していくかについて記述し、外向性の階層的構造について検討した。

結果および考察

まず、5因子まで抽出したところ、これらの5因子により全分散の79%が説明された。Table 2 は、各因子に対して0.30以上の負荷量を示した項目数を SSS と EPI の各尺度毎に示した。これによると、第1因子は EPI のE項目の

Table 2 The number of items loaded on each of the 5 factors
(The number in parenthesis denotes the number of the item in each scale)

Scale	Factor				
	1	2	3	4	5
Sensation-Seeking Scales					
TAS (10)	0	9	0	0	0
ES (10)	0	0	8	0	0
Dis (10)	2	1	2	0	1
BS (8)	0	0	0	0	3
EPI E scale and it's subscales					
E (24)	12	0	0	5	0
imp (9)	1	0	0	4	0
soc (12)	11	0	0	0	0

Notes. TAS : Thrill and adventure seeking
 ES : Experience seeking
 Dis : Disinhibition
 BS : Boredom susceptibility
 imp : Impulsivity ; soc : Sociability

Table 3 The number of items loaded on each of the 3 factors
(The number in parenthesis denotes the number of the item in each scale)

Scale	Factor		
	1	2	3
Sensation-Seeking Scales			
TAS (10)	9	0	0
ES (10)	7	0	0
Dis (10)	2	2	1
BS (8)	0	0	0
EPI E scale and it's subscales			
E (24)	2	10	5
imp (9)	2	0	4
soc (12)	0	10	0

Notes. TAS : Thrill and adventure seeking
 ES : Experience seeking
 Dis : Disinhibition
 BS : Boredom susceptibility
 imp : Impulsivity ; soc : Sociability

Table 4 Factor pattern of the Sensation-Seeking and extraversion items

No.	Item	Scale	FACTOR		
			1	2	3
Sensation seeking					
S 36	私は小さくても航海に耐えられるヨットならそのヨットで遠洋航海を試みたいと思います (B)	TAS	.51	.04	.12
S 27	私は登山家になりたいと思うことがよくあります (A)	ES	.47	.18	.06
S 29	私はスキーで急斜面をスピードを出して滑るのが好きです (B)	TAS	.45	.05	.02
S 21	パラシュート降下を一度やってみたい (A)	TAS	.44	.07	.02
S 1	水上スキーのようなスポーツを試みたい (A)	TAS	.44	.20	.08
S 13	飛行機の操縦をしたいと思います (B)	TAS	.43	.03	.01
S 9	スキューバダイビングを試みたい (A)	TAS	.43	.04	.06
S 11	私は時々冒険をしたくなります (B)	ES	.43	.13	.07
S 25	私は高い飛び込み台から飛び込むのが好きです (A)	TAS	.42	.01	.02
S 5	サーフィンを (波のり) を試みたい (A)	TAS	.42	.18	.01
S 23	不安定だが変化に富んだ社会に暮らす方が良かったと思います (B)	ES	.36	.03	.10
E 1	あなたは刺激的なことがらをよく求めますか (Y)	E (IMP)	.34	.25	.12
S 17	私は時々岸から離れて遠くまで泳いで行きたくになります (B)	TAS	.34	.09	.02
S 34	オートバイに乗ってみたい (B)	Dis	.33	.10	.01
S 7	旅行するとすればアマゾンの奥地のような未開地へ旅行してみたい (B)	ES	.33	.17	.08
S 15	よく知らない所でも一人でぶらぶらするのが好きです (A)	ES	.33	.13	.03
E 10	ほとんどどんなことでも一つの挑戦としてやろうとしますか (Y)	E (IMP)	.33	.19	.18
S 3	芸術家のヒッピーのように現実離れた人が好きです (B)	ES	.32	.25	.10
S 19	私は自分と意見が同じ人よりも異なる人と議論をしたい (A)	ES	.31	.01	.10
S 6	少々奇妙に見えても自分の好みにあわせた服装をするべきだと思います (B)	Dis	.30	.02	.14

Sociability				
E 46	社交的なつながりを多く持つのが好きですか (Y)	E (SOC)	.02	.64 .04
E 25	いつでも陽気なパーティに行って楽しめますか (Y)	E (SOC)	.02	.59 .12
E 27	他人から元気のよい人間だと思われていますか (Y)	E (SOC)	.07	.55 .00
E 15	概して、人と会うよりも本を読んでいる方が好きですか (N)	E (SOC)	.11	.54 .00
E 29	他人と一緒にいるときは、黙っていることが多いですか (N)	E (SOC)	.05	.53 .05
E 51	陽気なパーティでも本当に楽しむのは難しいですか (N)	E (SOC)	.04	.47 .01
S 2	酒が十分あって思いきり騒げるようなパーティが好きですか (B)	Dis	.03	.41 .18
E 17	頻繁に外出するのが好きですか (Y)	E (SOC)	.08	.40 .16
E 32	もし何か知りたいことがあれば、人に聞くよりも本で調べる方ですか (N)	E (SOC)	.16	.39 .21
E 20	特に親しい人が何人かいれば、友人は少なくともよいですか (N)	E (SOC)	.06	.37 .04
E 44	人と話すのが好きなので、知らない人でも話しかける機会を失うことはないですか (Y)	E (SOC)	.06	.33 .02
S 22	私は落ち着きがなくても感情表現の豊かな人の方が好きです (B)	Dis	.11	.30 .14
Impulsivity				
E 5	なにかをする前にはその事についてよく考えてみますか (N)	E (IMP)	.11	.02 .58
E 8	あなたはよく考えずにいろいろなことを行ったり、言ったりする方ですか (Y)	E (IMP)	.04	.01 .54
E 34	決断する前に、あらゆる利益と不利益を注意深く考えてみますか (N)	E	.05	.01 .48
E 41	行動はゆっくりしていて、慎重ですか (N)	E (IMP)	.02	.16 .43
S 26	私はときには卑わいな言葉を使います (B)	Dis	.08	.14 .39
E 13	一時の思いつきで、とっさにいろいろなことを行う傾向がありますか (Y)	E (IMP)	.09	.02 .32

Notes. S denotes SSS item, E denotes EPI item.

A and B denote the key statement for the SSS.

Y (yes) and N (no) denote the direction of the response for the increments of the EPI E score.

TAS : Thrill and adventure seeking ; ES : Experience seeking ;

Dis : Disinhibition ; BS : Boredom susceptibility ;

E : Extraversion ; IMP : Impulsivity subscale of extraversion ;

SOC : Sociability subscale of extraversion.

中でも社交性に関する項目が主に関係している。第2因子は SSS の TAS 尺度項目と関係しており、第3因子には SSS の ES 尺度項目が主に負荷している。第4因子は EPI のE項目の中でも衝動性に関する項目の一部が関係している。さらに、第5因子は SSS の BS 尺度項目の一部が主に関係していた。

次に、3因子まで抽出した結果が同様に Table 3 に示されている。なお、これらの3因子により、全分散の69%が説明された。第1因子は刺激希求性に関する因子であるように思われる。主に、SSS の下位尺度である TAS, ES として Dis の一部の項目、さらに衝動性に関する EPI の項目の一部が関係している。これに対して、第2因子は社交性に関する因子のように思われる。この因子に負荷を示した項目は主に、EPI の社交性に関する項目であるが、SSS の Dis 尺度項目の一部も関係している。第3因子は狭義の衝動性に関する因子であるように思われる。この因子に負荷を示したのは EPI の衝動性に関連した

Table 5 The number of items loaded on each of the 2 factors
(The number in parenthesis denotes the number of the item in each scale)

Scale	Factor	
	1	2
Sensation-Seeking Scales		
TAS (10)	9	0
ES (10)	7	0
Dis (10)	2	2
BS (8)	2	0
EPI Escale and it's subscales		
E (24)	1	10
imp (9)	1	0
soc (12)	0	10

Notes. TAS : Thrill and adventure seeking ;
ES : Experience seeking ;
Dis : Disinhibition ;
BS : Boredom susceptibility ;
imp : Impulsivity ; soc : Sociability

項目であるが、第1因子に負荷を示した項目とは別の項目であった。この3因子まで抽出した結果は、最も明快に外向性関連特性の下位構造を示しているように思われたため、各因子に負荷を示した項目の内容を Table 4 に掲載した。

次に Table 5 は2因子のみを抽出した結果について示している。第1因子は刺激希求性に関する因子であるように思われる。SSS と ES が主に関係し、さらに Dis と BS の一部の項目が関連している。しかし、EPI の衝動性に関する項目でこの因子に負荷を示したのは1項目のみであった。第2因子は社交性因子であると考えられる。EPI の社交性に関する項目の全項目と SSS の Dis 尺度の2項目が関係していた。この2因子解の結果からは、EPI の衝動性に関する項目はほぼ消滅している。

Fig. 1 は以上の結果を要約し、5, 3, 2 と抽出する因子数を減らして行った際に、各因子がどのように収束していったかを示した。なお、Fig. 1 のかっこ内の尺度はこれらの尺度を構成している項目の半数以下の項目のみが各因子に負荷していたにすぎなかったことを示している。これによると、5因子抽出した際の第1因子、すなわち社交性に関する因子は3因子解においても独立した因子を形成している。ところが、5因子解における SSS の TAS 因子および ES 因子は3因子解においては1つの因子にまとまり、さらにその際に5因子解では社交性に関する因子に負荷を示していた衝動性に関する項目の一部が、この因子に吸収されて行くことが示されている。次に、5因子解における

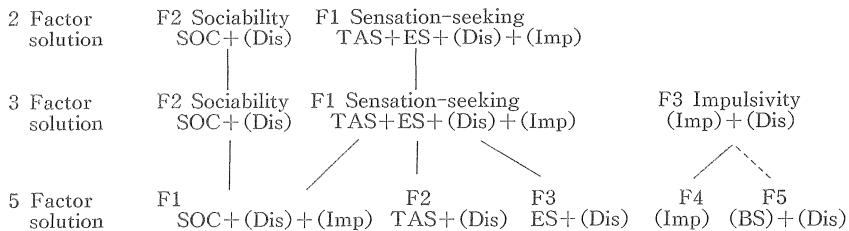


Fig. 1 Hierarchical structure of extraversion

Notes. TAS : Thrill and adventure seeking ; ES : Experience seeking ;
 Dis : Disinhibition ; BS : Boredom susceptibility ; Imp : Impulsivity ;
 SOC : Sociability

衝動性因子は3因子解においても独立した因子を形成することが分かる。最後に抽出する因子数を2因子にまで限定すると、3因子解における社交性に関する因子とTASおよびES項目によって代表される刺激希求性因子がほぼそのままの形で残るが、3因子解における衝動性因子はこの2因子には吸収されないことが示された。

Fig. 1に示されたように、EPIの外向性尺度項目とSSSの刺激希求性に関する4つの下位尺度項目を併せて因子分析を行うと、社交性因子と刺激希求性因子が優勢な因子として最終的に同定できた。さらに、研究1の結果を併せて考えると、この2因子の上位により高次の外向性次元を想定することが可能であろう。しかし、3因子解の第3因子に負荷を示した項目は、2因子解においてはほぼ消滅していることから、これらの項目に代表される衝動性特性を外向性次元に含めることには問題があるように思われる。

外向性の構造に関する従来の論議においても衝動性の取扱が問題にされてきたが、本研究において独立の因子を形成した衝動性因子は、Eysenck & Eysenck (1977)によって狭義の衝動性と呼ばれてきたものに該当し(Table 4の第3因子に負荷した項目を参照)、これに対して広い意味での衝動性と呼ばれてきたものは、本研究における刺激希求性因子に含まれるものではないかと推察される。また、本研究で記述した外向性の構造に関して、どの水準での記述を採用するかは理論的な観点からさらに検討されねばならないであろう。

総合論議

本研究においては、高次の次元として外向性をとらえることが可能であることを示し、この次元を構成する下位のいくつかの特性を同定した。しかし、従来から衝動性の名のもとに包括されてきた項目の内、広い意味での衝動性と呼ばれてきたものと刺激希求性特性とは同義であろうことが示された。他の1つは狭義の衝動性と呼ばれてきたものであるが、これは外向性次元を構成する要素と考えることは困難であることが示唆された。

近年の外向性に関する諸研究において、外向性を構成する要素の中でも衝動性が注目されるようになった。なぜなら、Eysenck (1967) の外向性に関する覚醒理論を検証しようとした実験において、予測された実験結果を導くのは主に社交性ではなく、衝動性に関する尺度を用いた場合であったからである。例えば、カフェインによって操作された覚醒の変化の個人差を検討した研究においては、社交性よりもむしろ衝動性尺度と強く関連することが報告されている (Anderson & Revelle, 1983; Craig, Humphreys, Rocklin & Revelle, 1979; Revell, Humphreys, Simon & Gilliland, 1980; Smith, Rypma & Wilson, 1981)。さらに、知覚運動課題や認知課題の遂行との関連を調べた研究においても同様の傾向が示された (Dickman, 1985; Glow, Lange, Glow & Barnett, 1983; Thackray, Jones & Touchstone, 1974)。また、Campbell (1983) は、衝動性傾向の高い個人は外界からの刺激作用の多い状況下で勉強することを好む傾向があることを報告している。このように覚醒理論にもとづいて行われたこれらの研究は、社交性特性よりも衝動性特性に焦点を当てた場合に興味深い結果を示した。また、Emmons & Diener (1986) は社交性特性の高い個人は肯定的な感情をしばしば経験する傾向があるのに対して、衝動性特性の高い個人は否定的な感情をよく経験する傾向があると報告しており、これら2つの特性は異なる状態と関連するであろうことを示唆している。

しかし、これらの研究で用いられた衝動性尺度は Glow et al. (1983) の場合を除き、全て EPI の外向性尺度の下位尺度である衝動性尺度を用いている。すでに指摘したように、EPI の衝動性に関する項目は単一の因子からのものではないようである (Eysenck & Eysenck, 1977)。それ故に、どの衝動性因子が最も重要であったかに関しては不明であった。

Eysenck and Eysenck (1963) によって作成された EPI を踏襲している日本語版 EPI においても同様の問題が存在している。本研究で明らかになったように日本語版 EPI の E 項目は社交性と、刺激希求性とはほぼ同義の広い意味での衝動性、そして狭義の衝動性に分かれる。寺崎 (1987) は SSS と EPI によって測定された外向性特性と視覚ビジランス作業の低下との関連について検

討したが、時間経過に伴う作業低下との間に相関が見られたのは SSS の TAS 尺度においてであった。さらに、Terasaki and Imada (1988) は SSS の下位尺度のなかでも TAS 尺度得点が刺激作用の強い食物を好む傾向と最も高く相関することを示した。ただし、この研究では EPI は用いられていなかった。

これらの結果と本研究で得られた結果を対応させると次のような解釈が可能であろう。すなわち、SSS のなかでも TAS 尺度は、刺激希求性を代表する典型的な尺度であった。確かに、EPI の E 尺度項目の中にも刺激希求性(広い意味での衝動性)に関連している項目は存在していたがその数は少なかった。このような点から考えると刺激希求性は刺激作用の最適水準の個人差(Zuckerman, 1979)や覚醒水準における個人差(Eysenck, 1967)と最も強く関連しているパーソナリティの表現型であろうと推測される。

本研究において、刺激希求性(広い意味での衝動性)と狭義の衝動性は現象的(経験的)に区別されることが示されたが、このことがどのような理論的意味を内包しているかに関してはさらに検討されねばならない。特に、狭義の衝動性と広い意味での衝動性を明確に区別した上で行われた実験的研究はきわめて少ない。唯一、このような研究を行っているのは Schalling, Edman & Åsberg (1983) においてである。彼らは独自に衝動性を測定するための尺度を含んだ質問紙である Karolinska Scales of Personality Inventory (KSP) を作成しているが、これによって測定される衝動性には2種類存在すると述べている。一つは impulsiveness と名付けられているもので、本研究の因子分析の結果得られた狭義の衝動性と内容はきわめて近いものである。他の一つは, monotony avoidance と名付けられており、本研究における刺激希求性(広い意味での衝動性)と近い内容のものである。彼らはおもに衝動性に関する生物理論を研究しているが、その中で、例えば近年動物や人間の活動性や社会化の過程と関係していることが指摘されているモノアミン系の働きとの関係について次のような事実を報告している。すなわち、人の血液から採取された血小板中のモノアミン酸化酵素(MAO)の水準は、Eysenck の外向性尺度ではなく、衝動性に関連したパーソナリティ特性と相関することを示した。特に、狭

義の衝動性項目と高く相関したことを報告している。このように、狭義の衝動性はそれ自体である特殊な性質を反映しているように思われるが、パーソナリティ・システムのなかで果たす役割についてはより多方面の研究が必要であると思われる。さらに、従来から行われてきた衝動性に関する諸研究との接点も今後求められねばならないであろう。

引用文献

- Anderson, K. J., & Revelle, W. 1983 The interactive effects of caffeine, impulsivity and task demands on a visual search task. *Personality and Individual Differences*, 4, 127-134.
- Bone, R. N., & Montgomery, D. D. 1970 Extraversion, neuroticism, and sensation seeking. *Psychological Reports*, 26, 974.
- Campbell, J. B. 1983 Differential relationships of extraversion, impulsivity and sociability to study habits. *Journal of Research in Personality*, 17, 308-314.
- Carrigan, P. M. 1960 Extraversion-introversion as a dimension of personality: A reappraisal. *Psychological Bulletin*, 57, 329-360.
- Craig, M. J., Humphreys, M. S., Rocklin, T., & Revelle, W. 1979 Impulsivity, neuroticism and caffeine: Do they have additive effects on arousal? *Journal of Research in Personality*, 13, 404-419.
- Dickman, S. 1985 Impulsivity and perception: Individual differences in the Processing of the local and global dimensions of stimuli. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 133-149.
- Emmons, R. A., & Diener, E. 1986 Influence of impulsivity and sociability on subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1211-1215.
- Eysenck, H. J. 1967 *The biological bases of personality*. Springfield: Thomas.
- Eysenck, H. J. 1987 The place of anxiety and impulsivity in a dimensional framework. *Journal of Research in Personality*, 21, 489-492.
- Eysenck, H. J., & Eysenck, S. B. G. 1964 *Manual of the Eysenck Personality Inventory*. San Diego: Educational and Industrial Testing Service.
- Eysenck, S. B. G., & Eysenck, H. J. 1963 On the dual nature of extraversion. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 2, 46-55.
- Eysenck, S. B. G., & Eysenck, H. J. 1975 *Manual of the Eysenck Personality Questionnaire*. San Diego: Educational and Industrial Testing Service.

- Eysenck, S. B. G., & Eysenck, H. J. 1977 The place of impulsiveness in a dimensional system of personality description. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 16, 57-68.
- Eysenck, S. B. G., & Eysenck, H. J. 1978 Impulsiveness and venturesomeness : Their position in a dimensional system of personality description. *Psychological Reports*, 43, 1247-1255.
- Farely, F. H., & Farely, S. V. 1967 Extraversion and stimulus seeking motivation. *Journal of Consulting Psychology*, 31, 215-216.
- Farely, F. H., & Farely, S. V. 1970 Impulsiveness, sociability and the preference for varied experience. *Perceptual and Motor Skills*, 31, 47-50.
- Glow, R. A., Lange, R. V., Glow, P. H., & Barnett, J. A. 1983 Cognitive and self-reported impulsiveness : Comparison of Kagan's MFFT and Eysenck's EPQ impulsiveness measures. *Personality and Individual Differences*, 4, 179-187.
- 岸本陽一 1987 日本版アイゼンク性格検査(EPI)の信頼性に関する研究 近畿大学教養部研究紀要, 18, 1-12.
- Revell, W., Humphreys, M. S., Simon, L., & Gilliland, K. 1980 The interactive effect of personality, time of day, and caffeine : A test of the arousal model. *Journal of Experimental Psychology : General*, 109, 1-28.
- Schalling, D., Edman, G., & Åsberg, M. 1983 Impulsive cognitive style and inability to tolerate boredom : Psychobiological studies of temperamental vulnerability. In M. Zuckerman (Ed.), *Biological bases of sensation seeking, impulsivity, and anxiety*. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associates. Pp 123-145.
- Smith, B. D., Rypma, C. B., & Wilson, R. J. 1981 Dishabituation and spontaneous recovery of the electrodermal orienting response : Effects of extraversion, impulsivity, sociability, and caffeine. *Journal of Research in Personality*, 15, 233-240.
- 寺崎正治 1987 Sensation seeking 特性とビジラノス作業の低下 日本心理学会第51回大会発表論文集, 584.
- Terasaki, M., & Imada, S. 1988 Sensation seeking and food preferences. *Personality and Individual Differences*, 9, 87-93.
- 寺崎正治・塩見邦雄・岸本陽一・平岡清志 1987 日本語版 Sensation-Seeking Scale の作成 心理学研究, 58, 42-48.
- Thackray, R. I., Jones, K. N., & Touchstone, R. M. 1974 Personality and physiological correlates of performance decrement on a monotonous task requiring sustained attention. *British Journal of Psychology*, 65, 351-358.
- Zuckerman, M. 1979 *Sensation seeking : Beyond the optimal level of arousal*. Hillsdale,

N. J. : Lawrence Erlbaum Associates.

Zuckerman, M., & Link, K. 1968 Construct validity of the Sensation-Seeking Scale.

Journal of Consulting and Clinical Psychology, 32, 420-426.

——寺崎 正治 文学部非常勤講師——

——今田 寛 文学部教授——